

村のマック・ジョンソン：創作

著者	中井，正文
雑誌名	龍南
巻	2 2 3
ページ	9 - 1 6
発行年	1932-12-03
URL	http://hdl.handle.net/2298/7084

村のマツク・ジョンソン

中 井 正 文

丘の上の家で西瓜を鱈腹食べさせられ、土産の大きな西瓜をブラブラさしながら一日で最も暑い時刻にジグザグの草路を下つて居るとお寺の鐘が鳴り出したので私は立ち止つて青草の上に憎い西瓜と並んで坐つた。

充分に繁茂した潤葉樹が私のバラソルであつた。碧い瀬戸内海を吹く海風が一足跳びにだんだん畑を駆け登つて直接に潮の匂ひを私の顔に叩きつけて行つた。私はしばらく此處で休むことを決心した。沖の小島も高い處から眺めると近くなる。丘の麓には部落の亂雑な屋根の堆積と標型の漁船の出入する可愛いらしい港が見える。

私はその時ふと五六段下の玉蜀黍畑の向ふ側に玉蜀黍より背の高い背高のつぼの毛唐のマツク・ジョンソンが銅像のやうに大様に佇んで居るのを發見して、なんだが心から嬉しくなつて朗らかに青空に向つて叫んだ。

—Yo-ho! Mack!

すると玉蜀黍が激しく揺れたと思ふとマツクの姿が消えて畑のこちら側にぬつとのつぼの姿を現はして眩しそうに手

を翳して丘のてつべんの方を仰いで居る。私は勇敢にジャンプの要領で續けさまにだんだん畑をマツクの所まで跳び下りた。

—親愛なるマツクヨ。君ハ此處デ何事ヲナシツ、アツタカ?

—友ヨ! 私ハ碧イ海ヲ眺メテ居タ。見ヨ、海ガ光ツテ居ル。

ふと氣がついて見るとこの賢詩人は婦人用のはでな浴衣を左り前にワイシャツの上に着てクラシックな太いバンドを締めて居る。そして草履の鼻緒を窮屈さうに指股に挟んで昂然と胸を張つて語るのである。ボマードをつけない彼の頭髪は玉蜀黍の赤毛のやうに風に亂れて光澤がない。彼は海を見はらかしてむやみに煙草をふかすのである。たとへダンヒルの上等品でなくとも、たとへ香り高いヴァジニアの葉でなくとも、恐らく亡くなつたマツクの親父の遺産であらう無恰好なヤニで黒く汚れたマドロス・パイプと、マツクが時々懷から取り出して無器用に葉をつまみ出す。その五錢のナデシコはなんとこの憂鬱な田園詩人の風貌に相應しきことかと讃歎しながら私は碧い海と少し日焼したマツクの痩せた顔とを交互に眺めた。しばらくすると私達はさつきの木蔭まで上つて行つて碧い海を眺めながら幸福な遅いティ・タイムを持つた。マツクは日本の西瓜はカルフォルニアのメロンのやうに美味いと讃めをやりながら殆んど一人で食べてしまつた。

それから私達は部落の方へ英語の流行唄を口ずさみながら丘を下つて行つた。村のメイン・ストリートを歩いて居ると子供達が祭の見世物を見て居る時のやうな物珍らしそうな眼をしてゾロゾロと私達の後について來ながら銘々勝手な突飛な批評や無邪氣な惡罵を浴せかけて嬉しそうに囃し立てるのだつた。

私はマツクに最も忠實な通譯者として、凡そ正反對の出鱈目を下手な英語で語つてやつた。

―彼ラハ君ノ美シイ顔ガ日本ノ天狗ト云フ神ニ似テ居ルト云ツテ居ル。

―彼ラハ君ノ偉大ナル体骸ヲ稱讃シテ居ルノデアル。シカシテ彼ラハ日本ノ着物ガ如何ニ良ク君ニ似合フコトヨト感心シテ居ルノデアル。

するとマツクは非常に嬉しがつて振り返つて漁村の汚い子供達の群に叮嚀にお辭儀して見せるのだつた。その様子があまり可笑しいので子供達は一度にガラガラ小さい齒を丸出しにして笑ひ始めるとマツクはますます意氣揚々と狭い往來を潤歩し始めるのだつた。

またこの模範的なアメリカの青年はすれちがふ娘達にまで敬意を表してお辭儀するので純情の娘達は全く當惑して恥かしそうに頬を赧めたり仲間の方をチロ／＼盗み見したりしてクスクス笑ふのである。可哀相に日本の事情に馴れないマツクは、「彼女ハ私ニ氣ガアルラシイ」とか「彼女ハウ・インク・シタノデアル」とか私にのろけ始めるので、私はこの認識不足のお人好しの友人を村はづれの渚の松原に到着するまで持て餘すのだつた。

マツク・ジョンソンはカルフォルニア大學の法科學生であつた。その彼が何かの緣故に依つてとかで、この瀬戸内海の私の故郷になんらの前觸れもなくひよつくりその見なれぬ風采を現はしたのである。

私が夏休みになつて遠い九州の高等學校の在る町から歸省してみるとマツクと云ふ毛唐が近頃亞米利加から歸つて來たK―と云ふ家へ泊つて居ると云ふので、私は或る晴れた日の午後自轉車に乗つて途々會話の作文を考へながら村はづ

れのマツクの泊つて居る家を訪問するつもりで出かけたのだが、一度その家の前をわざと通り過ぎて又廻れ右をしてブラブラ無駄な往復を試みた後三度目やうやく思ひきつてその家の前で自轉車を下りて瀟洒な白ペンキ塗りの門の中へ這入つて行つた。

すると目的のマツク・ジョンソンは縁側で矢張り日本の浴衣を無恰好に着て足坐アサをかいいて鸚鵡の鳥籠の下で退屈そうに小猫を愛撫して居た。その田舎者のやうな風采が氣に入つたので私は勇敢に話しかけた。

—Halloo! Mr. Mack! Good afternoon, sir!

マツクは微笑みもしないで達磨大師のやうに私を睥睨たまゝぶつきらばうに妙な日本語で答へるのだつた。

—コンニチハ。

これには私は全く面喰らつて折角の會話の腹案を臺無しにして慌てゝ日本語で話しかけた。

—初メテオ目ニカカリマスネ。

今度はマツクの方が豆鐵砲で撃たれた鳩のやうな顔をして微笑みながら首をかしげて見せた。私は再び慌てゝ下手な英語に直譯した。

氣がついて見ると私達は、「大層良イオ天氣デアリマス」と云ふ言葉を僅かな間に數回繰り返して居た。私達は長い間適當な話題に窮したのでマツクは座敷の中に駆け込むとトランクの中から一枚のカビネ型の寫眞を携へて來た。開いて見るとそれは美しいお嬢さんの寫眞だつた。マツクは得意になつて私のスイト・ハートであると説明した。しかしアメリカのフィルムを屢々見て居る私はその女の子がドロシー・ジョーダンと云ふ女優に必要以上に良く似て居るのを發見した

が、強いて妙な誤解でこの遠い異國に唯一人ある彼の寂しい心を亂すには及ぶまいと思つたので、善意に解釋して最上の外交辭令で返事をしたのだつた。

此ノ少女ノ美シイコトヨ。サナガラ亞米利加ノ映畫女優ノヤウニ美シクアル。

「アリガタウ。友ヨ、私ハ君ガ好キニナツタ。吾等ハコレカラ海水浴場ヘ行カウ。私ハ君ノ爲ニホテルデ乾杯シヨウデハナイカ？」

満足そうにそう喋言るとはや氣の短いマツクは立ち上つて外出の用意し始めた。

海水浴場は満潮であつた。透明な海は赤青黄緑白の海水着や帽子で美しい點描派であつた。この村からほど遠からぬ都會から避暑に來て居る人々はボートやヨットに乗つて遊んで居る。

私達はしばらく海岸のバラツクに坐つて都會の少女達の白い肉体を鑑賞した。跳込臺のてっぺんから幾度も繰り返してダイヴィングする眞紅の水着の少女をマツクは感謝して眺めて居た。

それから私達は安普請のホテルの食堂の海に面した窓に席を取つて落花生を食べては海を眺め、海を眺めてはビールを飲んだ。さすがに禁酒國に育つたマツク・ジョンソンは二本目のビールが空になる頃には全く良い氣持になつて陽氣に乾杯の唄やカレツヂ・ソングを唄つたり、妙な足取りでダンスをやり始めた。こゝに於いて私もマツクが好きになつた。

マツクは一枚の新聞の切り抜きを寶物のやうに大切に保存して居た。それはマツクの善行に關する地方の新聞の記事であつた。その事件は或る日いつものやうにマツクと私が散歩して居た時に起つた。とある一軒の家の戸口に黒山のや

うに人ばかりがして、その家の中では嘗てマツクを釣りに案内した若者が河豚に中毒して死にかゝつて居た。そう彼に説明するや否やマツクは目の色を變へて何らの挨拶もせず下駄を脱ぎ捨てて裸足のまま章駄天の如く呆氣にとられて居る村人を跳ね飛ばして走り去つた。しばらくするとマツクはマラソンの決勝點に入る選手のやうに疲勞して歸つて來た。しかも後生大事にマツクが携へて來たものは、マツクの母が遠い異境へ旅をする可愛い子に門出の時に與へた中毒の良藥ではなくて、どう間違つたものかなんとメンソレータムの壘であつた。その上不幸の若者は既に息絶へて居た。勿論その新聞にはメンソレータムのことなんか一字も記してはなかつた。私はますますこの人情深いマツクを好きになつたのである。

或る日マツクを訪問して見ると彼はうかぬ顔をして二週間もするとアメリカへ歸るのだと語つた。スカー・ハートが戀しいのかとからかふと唯父と母が戀しいのだと答へた。それから指を折つて數へて見てすでに私はこの村に三週間も滞在したのだと今更のやうに驚いて見せた。

マツクは夥しいガラクタ類を買ひ集めて居た。戀人の爲にと日本の扇。雪駄。錦の金入。花簪。絹片。人形。眞珠の首飾。繪葉書。岐阜提灯等まるでアメリカへ歸つて小間物店を開くのではないかと思はれるまで夥しく買ひ込んで居たが、何れも安物らしく思はれた。可哀相に日本の事情に馴れぬマツク・ジョンソンは模造の眞珠の首飾りを眞物と信じて高價に買ひ込んで居たのではあるまいか。それはそうとして私は先刻マツクの戀人についてつまらぬ疑念を挾んだことをしめじみと後悔し始めた。そこで私は今迄蒐集して居た名所風景の寫眞などを贈ると彼はひどく喜んで居た。

その後私が二三日の小旅行をして歸つて來ると、すでにマツクは豫定を繰り上げて横濱へ向つて出發した後であつた。父に訊ねるとマツクは私に會ふため數回私の家を訪問したそうである。

可哀相なマツク・ジョンソン！ 可哀相な彼が遂に私に會へなかつたことは同じ思ひの私にとつても同じく可哀相なことであつたのだ。マツクは數人の異國の人々に送られて夜更の寂しい故郷の停車場から悄然と汽車に乗り込んだに相違ない。冷酷な汽車は僅か一分間の停車の後彼を思ひ出の多い平和な日本の村から奪ひ去つたに相違ない。マツクは汽車の窓から首を出して人々に別れの言葉を投げながら未だ無駄に私が遅れ馳せに走つて來て手を握ることを空頼みに期待して居たかもしれない。その晩はせめて明るい月夜であれば良かったが……あの停車場は暗いもの寂しい停車場だ。彼は最後の夜、しかも訣別の場所で日本の蟋蟀の泣く音を心ゆくまで聽いて涙を流したかも知れぬ。せめて私が間に合つたら私は知つてゐる限りの美しい娘達を集めて鳴物入りでマツクの出發を賑はしてやるんだつたが……

私はマツクへ次のやうな意味の長い感傷的な手紙を書いた。

—親愛ナルマツク・ジョンソンヨ！

私ハ或ル事情ノ爲君ノ出發ノ際ニ居合セナカツタコトヲ心カラ残念ニ思フ。

君ガ去ツテ私ハシミジミト味氣ナク感ズル。日本ニハ白金ノヤウニ冷ク寂シイ秋ガ訪レタ。都會ノ美シイ女達モ皆歸ツテシマツタ。ア、！ 全ク失戀シタ時ノヤウニ、ヒツソリト且イラダタシイ心デアル。

かるふおるにやノ微風ハ君ト君ノ美シイ戀人ノ上ニ幸福ニ吹イテ居ルデアラウカ？ [私ハコレカラ懷シイフルサトノ

秋ヲ去ツテ、遠イ町ノ高等學校へ行カネバナラヌ。今私ハシミジミト君ノヤウニ、美シイホントウノ戀人が欲シイト思フノダ。

懷シイマツクヨ！ 幸福ヲ祈ル。早ク君ノ戀人ト結婚シタマヘ――

夏休みが終つて私は九州の遠い町へ歸つて行つた。その後私に新しいほんとうの戀人が出來てその夢のやうな幸福な日々の中に、いつの間にかマツク・ジョンソンのことを忘れるともなく全く忘れてしまつた頃、運命のやうに突然マツクから手紙と小包が届いた。丁度私の部屋に居合せた私の戀人と一緒に封を切つて讀んだのである。

五枚のレターペーパーが汚い不規則な字で埋められてあつた。そして五枚目の最後の行に、蟻の這つた後のやうに小さい字で「――以前の戀人とは悲しい別れ方をした」と殆んど私に讀んで貰ひたくないやうに記してあつた。私は幾分事情を知つてゐる彼女と顔見合せて微笑んだ。私はふと例のメンソレータム事件を聯想した。するとその藥を塗つたやうに私の皮膚が冷たくヒリヒリと顫へる様な氣がした。小包を開くとメロンが現はれた。恐らくマツク・ジョンソンはうつかり良く熟したカルフォルニヤ・メロンを小包にしたのであらう、長い航海ですでにその情のこもつた果物は殆んど食べられない迄に腐敗して居た。私はいかにもマツク・ジョンソンらしくて良いと思つて、その腐敗したメロンを部屋の書棚の上に飾つて置いて當分マツクの匂ひを、遠いカルフォルニヤの香りを嗅ぐことにした。